青銅器からみた紀元前一千年紀の朝鮮（概要）

宮里 修

序章……1
第１章　中国東北地方の琵琶形銅剣とその他の青銅器……1
第２章　朝鮮の銅剣……1
第３章　朝鮮の銅矛……2
第４章　多鈕鏡……2
第５章　異形青銅器……4
第６章　その他の青銅器……4
第７章　朝鮮青銅器文化の時期区分……4
第８章　副葬と埋納……5
第９章　地域と青銅器……5
終章　朝鮮初期農耕社会の発展と青銅器……5

序章

本論文の対象は「紀元前一千年紀」の「朝鮮」における「青銅器」である。

朝鮮は「朝日が鮮明なるところ」に由来する名称で，古くは『管子』や『史記』などに記された。14世紀末から500年余り存在した朝鮮王朝によって広く知れ渡り，地域名称として定着した。本稿では単なる地域名称として「朝鮮（＝朝鮮半島）」の語を使用する。

本稿は紀元前一千年紀の朝鮮における地域集団の台頭と盛衰の過程を青銅器によって構成する。細形銅剣文化は朝鮮の西北部，現在の平安北道地域をのぞく朝鮮全域にひろく分布した。細形銅剣文化は東北アジア地域のなかで際だった個性を示す一方でまた，中国東北地方に展開した琵琶形銅剣文化の一地方類型とみることもできる。中国東北地方の琵琶形銅剣文化が東北アジアの各地に波及するなかで，多鈕細文鏡や異形青銅器など極めて特異な青銅器を生み出したのが朝鮮の細形銅剣文化である。

中国東北起源の新来文化を受容し，独自の形制を生み出して著しい発展をとげた後，新しい時代の到来とともに役割を終え姿を消す。これが紀元前一千年紀の朝鮮における青銅器文化の大きな流れである。この間の経緯を具体的に跡づけて，朝鮮史および東北アジア史における意義を考えるのが本稿の課題である。

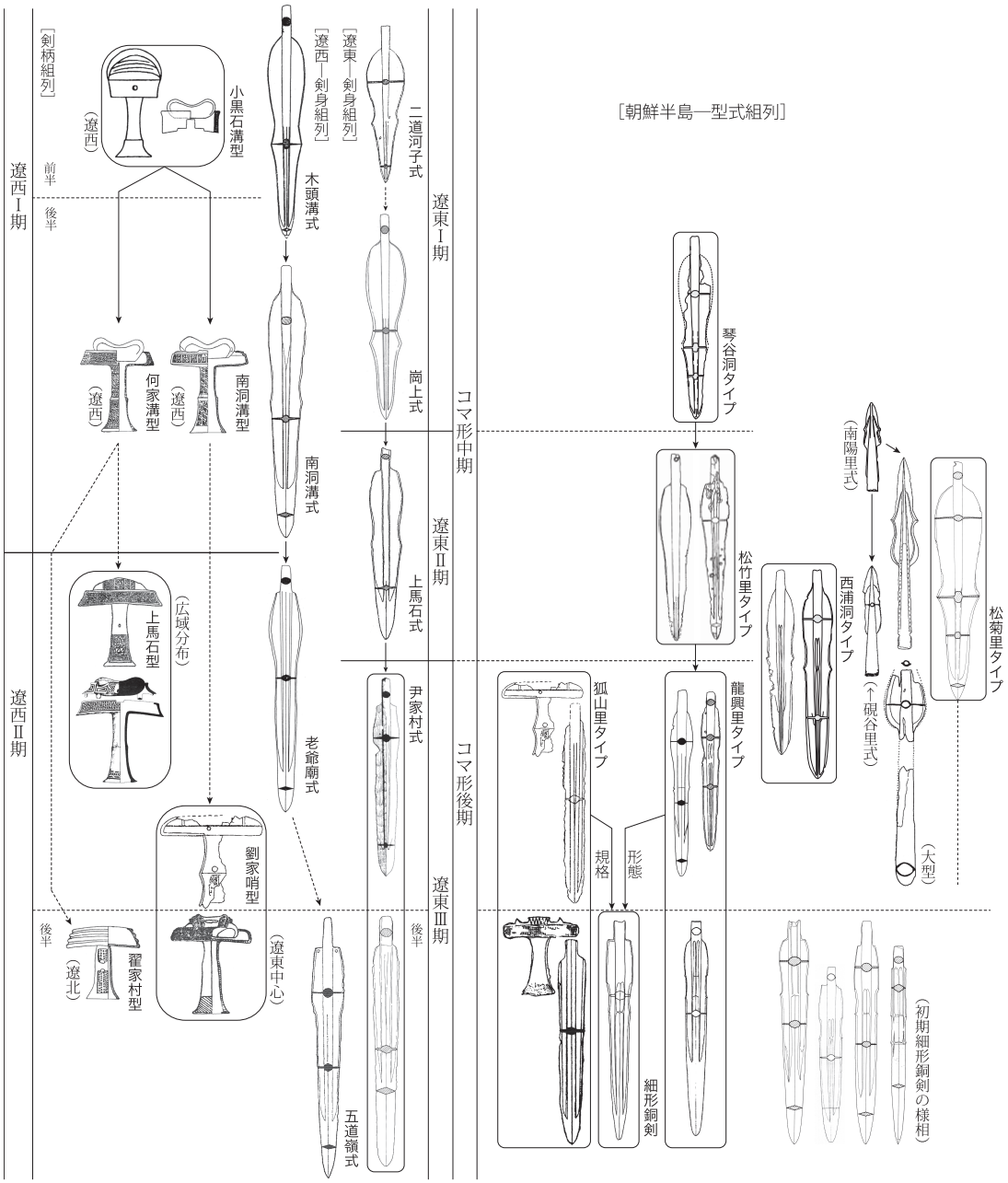
第1章　中国東北地方の琵琶形銅剣とその他の青銅器

朝鮮における各種青銅器の形成過程を東北アジア地域の流れに位置づける目的で，中国東北地方琵琶形銅剣文化を整理した。起源地である中国東北地方の琵琶形銅剣文化を取りあげ，琵琶形銅剣と剣柄の分類・編年をおこなった。遼西にはⅠ・Ⅱ期（各前後半），遼東にはⅠ・Ⅱ・Ⅲ期（前後半）を設定した。 遼西と遼東の時間軸を対照することで，東北アジア全域の青銅器を比較するための編年網を整備した。これによって朝鮮青銅器が独自化する過程を東北アジア地域の変動のなかに位置づけることが可能となった。朝鮮との比較のため銅矛，多鈕鏡，銅戈，銅鏃，銅斧の概況を整理した。

第2章　朝鮮の銅剣

朝鮮の青銅短剣については「細形銅剣の形成過程」「細形銅剣の展開と衰退」を課題とし，前者については中国東北地方との関連のなかで朝鮮琵琶形銅剣の変遷を捉え直し，細形銅剣の成立過程を考察した。後者については細形銅剣をはじめ把頭や剣捍をあわせた総合的検討をおこなった。

剣身と把頭の編年を対照した結果，銅剣に５つの段階を設定した。銅剣Ⅰ段階は琵琶形銅剣の諸型式が盛衰を繰り返し細形銅剣が形成される段階，銅剣Ⅱ段階は細形銅剣が成立する段階，銅剣Ⅲ段階は細形銅剣が定型化する段階，銅剣Ⅳ段階は青銅製把頭が成立する段階，銅剣Ⅴ段階は機能退化した細形銅剣と装飾化の進んだ把頭および剣捍が中心となる段階である。細形銅剣が成立したⅡ段階は遼東Ⅲ期後半に対応することをまた明らかにした。



中国東北地方の編年網と朝鮮における細形銅剣の成立過程

第3章　朝鮮の銅矛

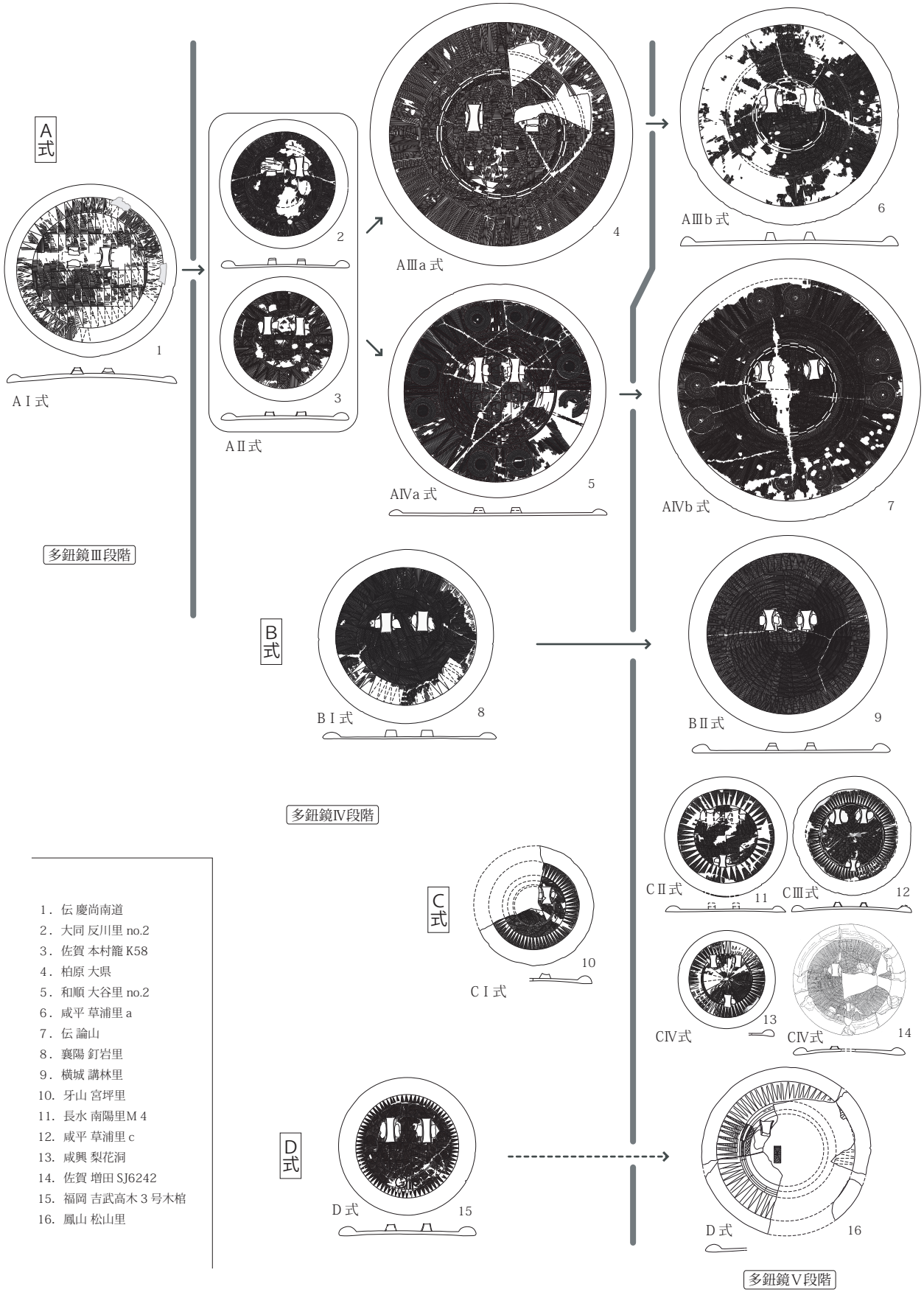
銅矛の基礎的整理に主眼をおき，型式分類・編年をおこなった。銅矛の時期相・地域相を次のように整理した。

型式分類の結果，琵琶形，中間形，細形，退化形を設定し段階的な移行を示した。琵琶形銅矛は受容後，直ちに朝鮮化し一部に地方型式を派生させながら段階的に細形銅矛へと変化していった。中間形の丁峰里式から変化して成立した細形銅矛はａ式が単純期を形成した後，西部と東南部に集中分布する地域型式である細形ｂ・ｃ・ｄ式が紀元前1世紀頃出現した。

第4章　多鈕鏡

多鈕鏡は複数個の鈕と円形凹面の形状，背面を飾る幾何学紋様を特徴とする銅鏡である。

多鈕鏡の受容，独自化した粗文鏡の形成，細文鏡の成立と消滅という一連の流れをより具体的にあとづけることを課題とし粗文鏡，細文鏡を個別に主題化し検討した。



多鈕細文鏡変遷図

型式分類・編年の結果，多鈕鏡に５つの段階を設定した。多鈕鏡Ⅰ段階・Ⅱ段階が粗文鏡，多鈕鏡Ⅲ段階・Ⅳ段階・Ⅴ段階が細文鏡にあたる。中国東北地方の遺制を残す多鈕鏡Ⅰ段階，粗文鏡に複数系列が展開する多鈕鏡Ⅱ段階，粗文鏡の系列が解体し規格化された製法による細文鏡へ編成される多鈕鏡Ⅲ段階，差異

化される細文鏡に複数系列が形成される多鈕鏡Ⅳ段階，明確に差異化された細文鏡諸型式の組合せが形式化される多鈕鏡Ⅴ段階と変遷を跡づけた。

第5章　異形青銅器

異形青銅器は土製鋳型による曲率の高い形状と凹文に特徴付けられる用途不明の青銅器群である。

朝鮮青銅器を象徴的に特徴づける器物でありながら異形青銅器の研究は永らく不振であった。本稿では竿頭鈴の分析を手掛かりに製作技法と地域性の関係を整理して，異形青銅器全体の流れを捉え直した。

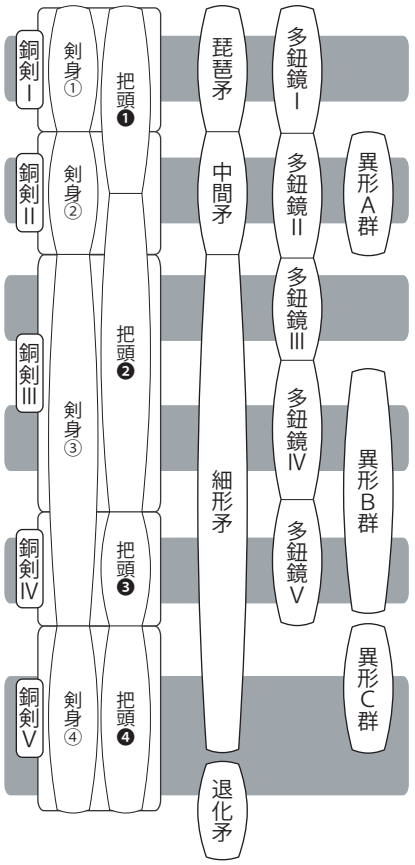
異形青銅器全体にはＡ群・Ｂ群・Ｃ群の３群を設定した。異形青銅器Ａ群は剣把形銅器・防牌形銅器・喇叭形銅器・円蓋形銅器・小銅鐸から構成され，文様が「貼り帯技法」によって施文される。異形青銅器Ｂ群は八珠鈴・双頭鈴・組合式双頭鈴・柄付銅鈴・竿頭鈴・円蓋形銅器・小銅鐸から構成され貼り帯技法によって施文される。異形青銅器Ｃ群は竿頭鈴・錨形銅鈴・蚕形銅鈴・柄付銅鈴・小銅鐸から構成され文様は原型施文による。３群は時期差の関係にあり，Ａ群とＢ群は文様モチーフと施文技法に連絡があり，Ｂ群とＣ群は一部の器種に連絡がある。Ｂ群とＣ群の間には分布域の移動という大きな変化があった。またＢ群とＣ群の間には技術的断絶もあり地域間の関係が大きく変わる状況を反映した。

第6章　その他の青銅器

資料数等の問題から銅剣や多鈕鏡のような詳細な検討に耐えないその他の青銅器について概況の把握を試みた。武器として銅戈，銅鏃を，農工具として銅斧，銅鑿，銅鉇について研究と資料の概況を整理した。それぞれの器種で，琵琶形銅剣時期と細形銅剣時期に対応する時期差と特定型式における地域的偏りを把握した。

第7章　朝鮮青銅器文化の時期区分

第２章から第６章までに明らかとなった各器種の変化階梯を比較し接点をもとめ，朝鮮青銅器文化の時期相を抽出した。結果，朝鮮青銅器文化に形成期，発展期1〜4期，衰退期の6期を設定した。初期の散発的流入を出現期とした。



形成期　中国東北地方から琵琶形銅剣文化を受容，細形銅剣文化が形成される時期
〔草島タイプ小銅鐸，有茎銅鏃，扇形ａ式銅斧，板状銅鑿。長方形銅斧Ａ類 が出現〕
ex. 平壌新城洞　（紀元前６〜５世紀）

発展１期　細形銅剣が成立。銅剣・多鈕鏡は多様な在り方をしめす
〔扇形ｃ式銅斧，有銎銅鑿，銅鉇 が出現〕
ex. 大田槐亭洞，礼山東西里，牙山南城里，全州如意洞　（紀元前４世紀後半）

発展２期　細文鏡形成期。細形ａ式銅矛単純期。異形青銅器群は断絶
〔銅戈，有肩円刃斧，長方形銅斧Ｂ類 が出現〕
ex. 扶餘九鳳里

発展３期　細文鏡の多様化。異形青銅器Ｂ群の出現。細形ａ式銅矛単純期
〔有肩銅斧 が出現〕
ex. 和順大谷里，信川龍山里，大同反川里

発展４期　細形銅剣文化の形制が整う。形式化した細文鏡。金属製把頭の登場
〔戦国系鉄器，ガラス製品，有銎鏃〕
ex. 咸平草浦里，扶餘合松里，鳳山松山里 舍叱’골，咸興梨花洞など
（紀元前２世紀代）

衰退期　楽浪−漢式文物の登場。青銅利器の機能退化と変質，鉄器化。墓制の変化
〔有文銅戈・異形戈 が登場。車馬具，漢鏡，鉄器〕
ex. 大同上里，平壌貞栢洞，大邸坪里洞，昌原茶戸里，慶山林堂，金海良洞里など
（紀元前１世紀）

朝鮮青銅器文化の時期相

第8章　副葬と埋納

青銅器の社会における意味を把握すべく，青銅器が使用された２つの場，埋納儀礼と埋葬儀礼について検討した。埋納については各地域での青銅器受容期に埋納例がやや集中する傾向が浮かびあがった。副葬については棺内・棺外副葬品の質的違いを具体的に示し，棺外への副葬に青銅器保有の格差が表現されることを明らかにした。

埋葬儀礼においては，亡骸を扱う段階と，棺を閉じた後の行為には質的な違いを認めた。被葬者を収める段階は職能やエピソードなど故人の社会的位置が前面に出るが，閉塞後は埋葬儀礼を執行する共同体の組織原理がより強く発揮される。敷衍すると多鈕鏡は個人の職能により強く結びつき，異形青銅器は共同体との結びつきが強い。剣を佩いて鏡をもつ指導者の姿，異形青銅器をもちいた共同体祭儀の在り方を垣間見せる。

第9章　地域と青銅器

第２章から第８章において把握された地域性を各地域の在り方として捉えなおした。結果，地域間の時期ごとの盛衰が鮮明に浮かびあがった。西部，中西・西南部，東南部が各時期の中心となる。

西部地域では，出現期に断片的に青銅器を受容した後，形成期になると遼東から琵琶形銅剣を受容し，細形銅剣文化を誕生させた。その後西部は活力を失う。細形銅剣文化の成立と共に中西部が台頭する。突然多量の青銅器生産をおこない多鈕鏡を多様に変化させた。前触れもなく異形青銅器を登場させ新たな青銅器の体系をつくりだした。中西部では段階的に青銅器文化の形制を整え，西南部をふくめて青銅器生産，青銅器文化の中心となる。戦国系鋳造鉄器を受容する頃，細形銅剣文化の形制は完全に整えられた。中西部は多鈕細文鏡を発信する。発展期が終わる頃，細形銅剣文化の象徴でもある異形青銅器Ｂ群が東進の動きをみせる。衰退期になると中西部の威容は突然失せ，楽浪–漢式文化に組み込まれた西部と，細形銅剣文化を独自に展開させた東南部が急激に台頭する。鉄器化が進むと共に青銅器は遺制を維持しつつ新たな役割を担い変容する。やがて朝鮮の青銅器文化は意味を失い姿を消した。

終章　朝鮮初期農耕社会の発展と青銅器

終章では前章までの分析結果を総合して，紀元前一千年紀の朝鮮における青銅器文化を通史として記述した。

―出現期―

紀元前11世紀の後半，周の武王が殷の紂王を討ち殷王朝は滅びた。伝説によれば，紂王の親族であった箕氏は朝鮮に走り周の武王に封じられたという。紀元前770年には異民族の侵入をうけた周王室が都を関中から東の洛陽に移した。春秋戦国時代の始まりである。

西周から春秋にかけての時期に，中国東北地方では剣身，柄，把頭を別々につくって組み立てる独自の構造をもった琵琶形銅剣が成立した。遼西で琵琶形銅剣が成立して間もなく，東北アジアの各地に琵琶形銅剣文化が波及した。

同じ頃，朝鮮の東南部に琵琶形銅剣の形制が伝わった。円盤形の把頭をもつ小黒石溝型剣柄を模した磨製石剣は出土状況が不明であるが無文土器時代前期に編年される。伝播の過程は全く不明で東南部でも剣の形制は後に継承されない。

朝鮮西部には銅鑿や銅釦が現れた。特別な扱いを受けることなく石器などと共に住居址床面に置かれていた。出現期の青銅器は偶発的な流入で，青銅器の存在は朝鮮の初期農耕社会に大きな影響を及ぼしていない。朝鮮中西部の社会は小集団が小規模な農耕をおこなう段階にあった。

―形成期―

遼西地方でＴ字形剣柄が成立し琵琶形剣身＋Ｔ字形剣柄＋把頭の構造が定型化した頃，遼東でも琵琶形剣身の形状が定型化した。第二松花江流域には琵琶形銅矛が卓越した。各地で青銅器製作が始まると共にそれぞれに独自性が見え始めた。このとき明らかな影響力をもって琵琶形銅剣文化が朝鮮に波及する。琵琶形銅剣文化の器種は遼西がもっとも豊富で東に向かうほど器種が欠落する。

朝鮮にもたらされた器種は剣，矛，多鈕鏡，鏃，斧，鑿，小銅鐸である。銅剣は遼東の崗上式銅剣をモデルに製作が始まった。脊に鎬をつくり込まないなど直ちに独自の理解を発揮した。銅矛は恐らく第二松花江

流域と関係しながら，鋒・脊・刃鎬に特異なディフォルメを施す独自の形態に変容した。遼北から伝わった多鈕鏡は文様の忠実な模倣から始まったが，鈕をつくり込む手順が異なるなどやはり独自の理解に基づいて製作された。有棘有茎鏃は遼東系譜のようだが脊のつくりが銅剣と同じでやはり起源地からの変容がある。朝鮮の青銅器は遼東，遼北，第二松花江流域と様々な系譜を引いた。

地域内における型式の連続性によれば，剣・矛・多鈕鏡・鏃の製作は朝鮮西部で始められた。銅剣が松竹里タイプへ移行する頃，西部以外でも生産がはじまった。鋳型の出土や独自型式の発生から複数地域で青銅器が製作されたと分かるが，細形銅剣，丁峰里式・細形銅矛，Ⅱ段階粗文鏡へ繋がる型式変化は西部でのみ確認される。細形銅剣文化を生み出したのは西部地域であり，担い手はコマ形土器文化の人々であった。西部では凹文の小銅鐸やＴ字形剣柄の搬入など遼東との関係を強めていく。中部は最古型式の銅剣が伝えられ，西浦洞タイプ銅剣の分布圏を形成するなど西部と密接な関係にあった。

西部と中部の緊密さと対峙するように，南部朝鮮にあたる中西部・西南部・東南部は青銅器を特徴的に変容させた。南部朝鮮で製作されたのは剣，矛，鏃である。剣・矛はいずれも著しく大型化され，剣では脊の隆起や後段の膨らみ，矛では刃鎬の隆線が過度に強調された。利器の機能を期待されたものではなかった。型式変化が認められず一時期に集中製作した様相であった。また，東南部では大型化した武器形青銅器の製作につづいて立柱形の把頭が考案された。武器としての銅剣は普及しなかったが，剣柄の形制は有柄式磨製石剣に取り入れられ，緊縛の便から平枕形を改良して立柱形が考案された。南部朝鮮独特の銅剣茎の溝も剣柄形制の工夫のなかで生まれた。石製の立柱形把頭は東南部から朝鮮全域に波及した。

東部では西部に遅れて矛や斧，小銅鐸の製作が開始された。銅斧は西部にない遼東系譜，鴨緑江流域系譜であり東部が独自に中国東北地域と接触をもったことがわかる。

青銅器は一般的に副葬されるが，各地域とも青銅器の出現期に埋納をおこなう傾向があった。最古型式を生産した西部では住居址から南陽里式銅矛が出土，西部に遅れて青銅器が出現した各地においては，中部で西浦洞タイプ銅剣，東南部で松菊里タイプ銅剣が埋納された。埋納儀礼は共同体的な行為であるが，青銅器の出現期に埋納行為がみられるのは，青銅器の希少性と指導層の非突出に起因するであろう。南部朝鮮ではのちに破片の副葬として初期の青銅器が消費された。

形成期は無文土器時代前期～中期にあたる。西部で最古型式の銅剣が細形銅剣へと至る型式変化を開始し，各地での青銅器生産が始まった頃，中西部は中期社会へと移行した。水稲耕作を開始した農耕社会は拡大し，同時に分節された。全体性を強調した社会原理は綻び指導層が浮上した。

―発展期―

西部で独自に変化した銅剣は細形銅剣となり，銅矛は丁峰里式銅矛へ変化，粗文鏡はＡⅣ式が誕生し多様な型式が展開した。細形銅剣文化は，青銅器製作の伝統がほとんど認められなかった中西部が担い著しい発展を遂げた。土製鋳型による青銅器製作を開始した中西部は多鈕鏡に多様な型式を発生させ，系譜不明の異形青銅器Ａ群を誕生させた。粗文鏡製作においては鈕座の形成・同心円の区画などで鴨緑江流域と相互に影響関係をもった。

発展期の間，中西部地域が一貫して青銅器製作の中心地・発信地であった。量・質ともに他に抜きん出た。中西部の青銅器製作の核は土製鋳型にあった。発展２期には多鈕細文鏡を生み出し，発展３期には異形青銅器Ｂ群を誕生させた。細文鏡は土製鋳型による青銅器製作が可能な中西部でほぼ独占的に製作され配布された。独自の型式をもつ西部での製作も予想される。一方，発展期の末期を除けば，異形青銅器が中西部・西南部以外にもたらされることはなかった。これは異形青銅器と多鈕細文鏡の性格の違いによる。多鈕鏡は被葬者に添えて棺内に副葬された。棺外に置かれた異形青銅器は埋葬儀礼の執行者側―共同体側で機能した。多鈕鏡は職能の象徴として指導者の正当性を保証し，異形青銅器は共同体を統べた。中西部は各地の指導者に職能の後ろ盾を与えたが，共同体統合のシンボルは内部にのみ留めた。細文鏡の形制が整った発展４期には大型で複雑な文様をもつＡ式を中西部・西南部にとどめ，他地域には小型のＣ式と一部にＢ式を配布した。多鈕鏡の型式差は格の違いの表現として機能した。

中部には鋳型があり，東部には石製鋳型による製作伝統があった。西部は勿論，中部，東部でも青銅器の製作自体はおこなわれた。東南部での製作は分からない。仮に形成期に松菊里タイプ銅剣をつくったとしてもその製作伝統は断絶した。しかし土製鋳型の存在は認められず，いずれの地域も多鈕鏡については中西部からの配布を受けねばならず，指導者としての正当性が中西部地域に保証される格好となった。

発展期の青銅器埋納は東南部に集中した。形成期と同じように青銅器自体の希少性に原因があった。東南部における指導者の有り様については中期の支石墓にその台頭が認められたが，のちの展開は不明である。発展期の東南部には青銅器自体が少なく，青銅器の製作を行うことも安定した供給を受けることもままならなかった。地域間関係における地位はやや低いものであった。

中西部・西南部を中心とした地域間関係は発展４期の後半になって大きな転機を迎えた。異形青銅器Ｂ群の竿頭鈴がＩａ式からＩｂ式へ変化する頃，戦国系鋳造鉄器が副葬品に加わった。竿頭鈴Ｉｂ式を含む異形青銅器Ｂ群は既存の分布域を超えて東南部，東部にまで拡がった。これが異形青銅器Ｃ群を生み，東南部に本格的な青銅器生産をもたらした。

発展４期に現れた戦国系鉄器についてはまだ時期と系譜が正確に把握されていない。発展４期の中心年代は紀元前２世紀代である。紀元前２世紀には衛氏朝鮮が朝鮮西部にあった。『史記』によれば，衛満は遼東の太守と結んで諸蛮夷の管理を担った。漢王朝と結ぶことで蓄財した衛満は周囲の小邑を制圧し，真番や臨屯を帰属させた。

衛氏朝鮮は朝鮮の西部を中心に広大な範囲を支配下においた。しかしこの記録にもとづいて発展４期の状況を捉え直すのは難しい。衛満が配下においた燕や斉からの亡命者，あるいは遡って『魏略』にある秦末に準王のもとに逃げこんだ燕・斉・趙からの亡命者が，朝鮮に鋳造鉄器をもたらしたと考えることはできる。しかし発展４期は細文鏡の形制がもっとも整った時期である。西部にも細文鏡はあったが中心地は中西部であった。発展４期における朝鮮西部の考古学的実態が詳しく分からない以上，これ以上議論を展開するのは難しい。いずれにせよ，鋳造鉄器の出現と軌を一にして異形青銅器Ｂ群の東進がおこり，発展４期を最後に中西部の栄華は終わった。

発展期の各時期に対応させるかたちでは集落・墓域の様子を知ることができない。

―衰退期―

発展４期を最後に中西部および西南部の青銅器文化はほぼ消滅した。中西部ではただ１例，鉄剣を含む青銅器埋納がおこなわれた。西南部では東南部と同型式の剣挍を製作するなど時代の変化への対応をみせた。しかし折り曲げた銅剣の埋納などは，ある種末期的状況をうかがわせる。

西部では楽浪漢墓の築造によって遺跡が急増した。衛氏朝鮮代の土着豪族を取り込んだ漢の郡県支配が始まった。機能退化および異形化した銅剣，金具が嵌装された剣挍，銅矛など細形銅剣文化の遺制は一定期間残った。衰退期の早い段階には朝鮮西部独自の車馬具も製作されたが，紀元前後を境におそらくは世代交代にともなって楽浪―漢式文物に統一されていった。

東南部は発展４期に伝わった中西部の青銅器製作技術を取り込んで異形青銅器Ｃ群を形成した。青銅器製作自体が促進され，矛や戈には他にない独自の型式を創出した。剣挍は金具を嵌装した型式がうまれ，金属製の把頭には様々な装飾が施された。剣身のない鞘のみの副葬もあった。長大化あるいは加飾された銅矛，挍によって飾られた銅戈も示すように，東南部の青銅武器は視覚効果を重視した。独自の青銅器と共に衰退期の東南部を特徴づけたのは種々の外来文物であった。西部・楽浪郡からは，鉄器・漢鏡・車馬具など楽浪―漢式文物がもたらされた。楽浪の製陶技術の影響を受け，無文土器から瓦質土器が成立した。他方，日本・倭からは武器形青銅祭器がもたらされた。また東南部からは異形青銅器Ｃ群や有文銅戈などが楽浪へ伝わった。

発展４期までの地域間関係を転覆させた東南部の台頭は，板状鉄斧の大量副葬に示される豊富な鉄資源を後ろ盾とした。発展４期になって朝鮮に広まった鉄器文化は，既存の秩序を支えた物質文化の体系を大きく揺るがせた。鉄器の確保が重要な懸案事項となったとき，東南部の潜在力に眼が向けられた。異形青銅器Ｂ群の東進に現れた人の動きは，青銅器づくりにとどまらない組織や知識を東南部にもたらした。結果，東南部地域は青銅器文化とともに鉄器文化をいちじるしく発達させ，楽浪や倭はこぞって鉄資源の獲得に乗り出した。すなわち発展４期の頃，東北アジアの国際関係が鉄を主要因に再編されるなか，東南部は鉄資源によって一躍脚光を浴びることになり東北アジアにおける求心力を獲得した。すなわち朝鮮青銅器文化の衰退期は，細形銅剣文化の終焉であり且つ「弁辰鉄」の前史でもある。